

大学内特定健診における腹囲測定 of 正確性に関する追跡調査

○富永 壽人<sup>1</sup>, 川崎 直人<sup>1,2</sup>, 佐川 和則<sup>2,3</sup>, 高島 規郎<sup>2,3</sup>, 村上 悦子<sup>1</sup>,  
掛樋 一晃<sup>1,2</sup> (1近畿大薬, 2近畿大アンチエイジングセ, 3近畿大健康スポーツ教育セ)

【目的】メタボリックシンドロームは予備群まで含めると約 5400 万人いるとされ、将来、生活習慣病に罹患する可能性が非常に高くなる。2008 年 4 月から 40~74 歳までの人を対象に、特定健診・特定保健指導という新制度が実施され、特定健診は、腹囲測定によるメタボリックシンドローム (内臓脂肪症候群) 診断のために導入された。しかし、腹囲測定 of 妥当性について検討された報告はない。本研究では、大学教職員のデータを統計解析し、腹囲測定 of 正確性を評価するために、2008 および 2009 年度のデータを追跡調査した。

【方法】本研究は近畿大学薬学部倫理委員会の承認に基づき、インフォームドコンセントや個人情報保護に配慮して実施され、同意の得られた男性 449 名 (平均年齢 48.5±11.5 歳)、女性 183 名 (平均年齢 40.7±11.1 歳) のデータを用いた。ただし、追跡調査は男性 279 名 (平均年齢 52.8±7.9 歳)、女性 77 名 (平均年齢 50.0±6.6 歳) を対象とした。統計処理および有意差の検定には Windows JMP ver.8.0.2 (SAS Institute Inc.) を用いた。

【結果と考察】体重変動、身長変動および BMI 変動と腹囲変動との関係から腹囲測定は、正確に行われていることが明らかとなった。また、メタボリックシンドロームの追跡調査の結果、2009 年度で悪化した群は男性では 14.3%、女性では 6.5% であった。一方、改善した群は男性では 5.8%、女性では 0% であった。さらに、アンケート調査との因果関係を調査した結果、就寝前 2 時間以内に夕食をとる回数が 3 回以上、朝食抜き週 3 回以上、1 年間に体重増減±3kg の項目において、オッズ比がそれぞれ 2.5, 2.4, 2.3 と高い値を示した。これらのことから、食習慣などのライフスタイルの重要性が示唆された。